



みんなでつくる
SAITAMA
STYLE

大玉
スタイル



大玉
スタイル

2023-2024

theme

想いを分かち合う

埼玉県障害者芸術文化活動
支援センター

アートセンター集

art center syu 2023 report

「令和5年度埼玉県障害者芸術文化活動普及支援事業」報告書

社会福祉法人
みぬま福祉会
Minuma Fukushikai

障害のある人たちの“表現”を 社会に広げるために —

2023年度の報告書は「想いを分かち合う」がテーマです。
支援のあり方、表現へのまなざしなどについて
特に共有を深めた取り組みをtopicsとしてご報告します。

「令和5年度埼玉県障害者芸術文化活動普及支援事業」報告書
art center syu 2023 report スタイル
みんなでつくる 埼玉方式

もくじ

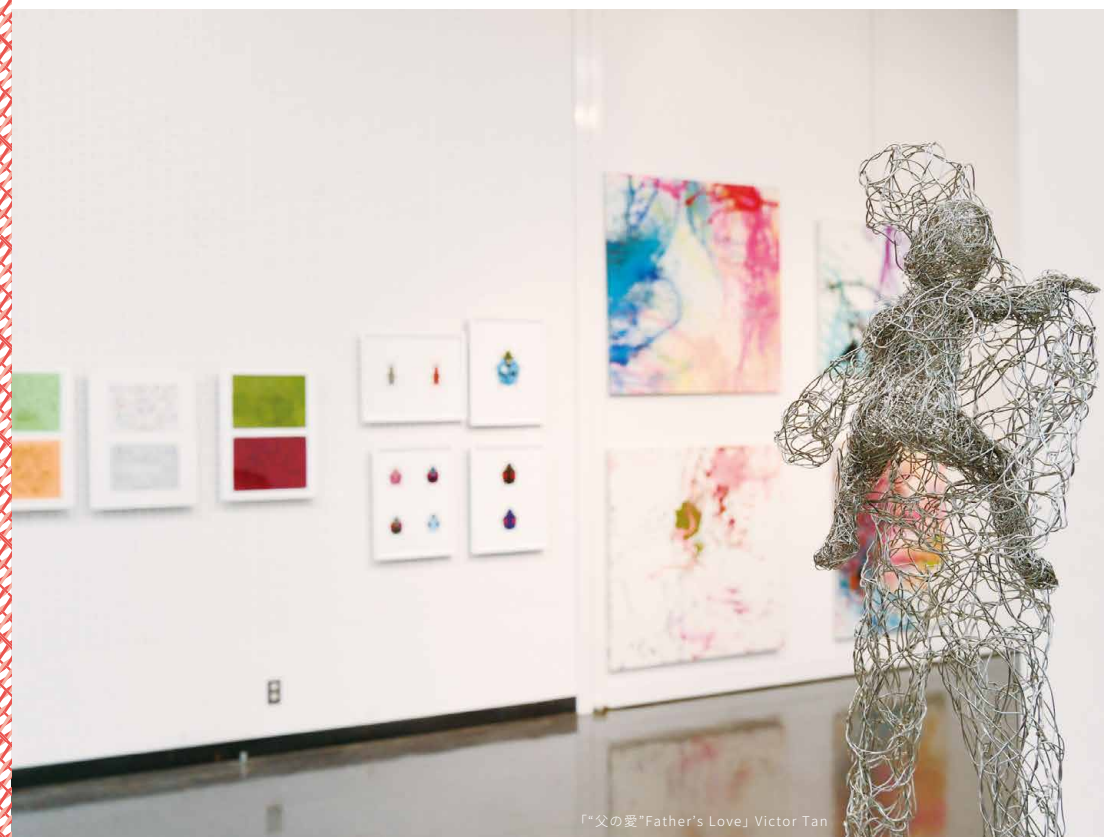
埼玉県障害者アートネットワーク	02
活動概要 みんなでつくる展覧会	05
活動報告	
定例会・研修会・施設活動紹介	07
topics 表現活動について話し合う研修会	09
表現活動状況調査	09
作品選考会	11
topics 本選考会	12
埼玉県障害者アート企画展	13
topics 関連企画・ギャラリートーク	16
topics アーティストトーク	17
topics 作品鑑賞プロジェクト	19
織り&グッズ展	21
タママップダンスワークショップ	23
演劇で新しい表現を見つけるプロジェクト	24
アートセンター集 相談窓口からのご報告	25
タママップコラボマンガ	26
埼玉県障害者芸術文化情報	27
タママップだより	29
TAMAP±0参加団体	31
工房集とアトリエ見学のご案内	31



「埼玉県は特にこれといって特色がないんです」と言ってしまうほど、謙虚で控えめで県内の自慢が下手な県。でも、良いところはたくさんある。そういったイメージを一言であらわすと…±0。埼玉県は「ブラマイゼロだ」という障害のあるメンバーの意見に「埼玉をもっとアップ(向上)させたい」「県内のつながりをマッピングしよう」という想いを合わせて「埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±0(タママップ)」と命名しました。謙虚で控えめな中に様々なものを良しとする懐の深さ(ごちゃませ上等!)を持ち合わせている。「そんな埼玉を盛り上げていこう!」という想いを込めています。

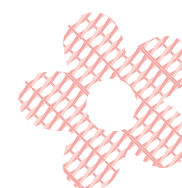
本編の青色の吹き出しは福祉施設職員等の感想です

日々の表現と向き合う



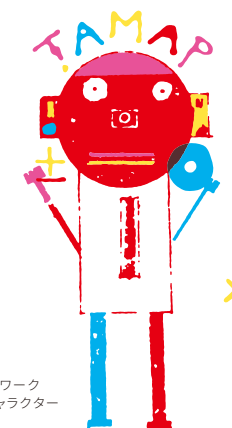
「父の愛」Father's Love Victor Tan

14回目を迎えた「埼玉県障害者アート企画展」。今年度もタママップの選考により、多彩な作品が一堂に会しました。詳細はP13

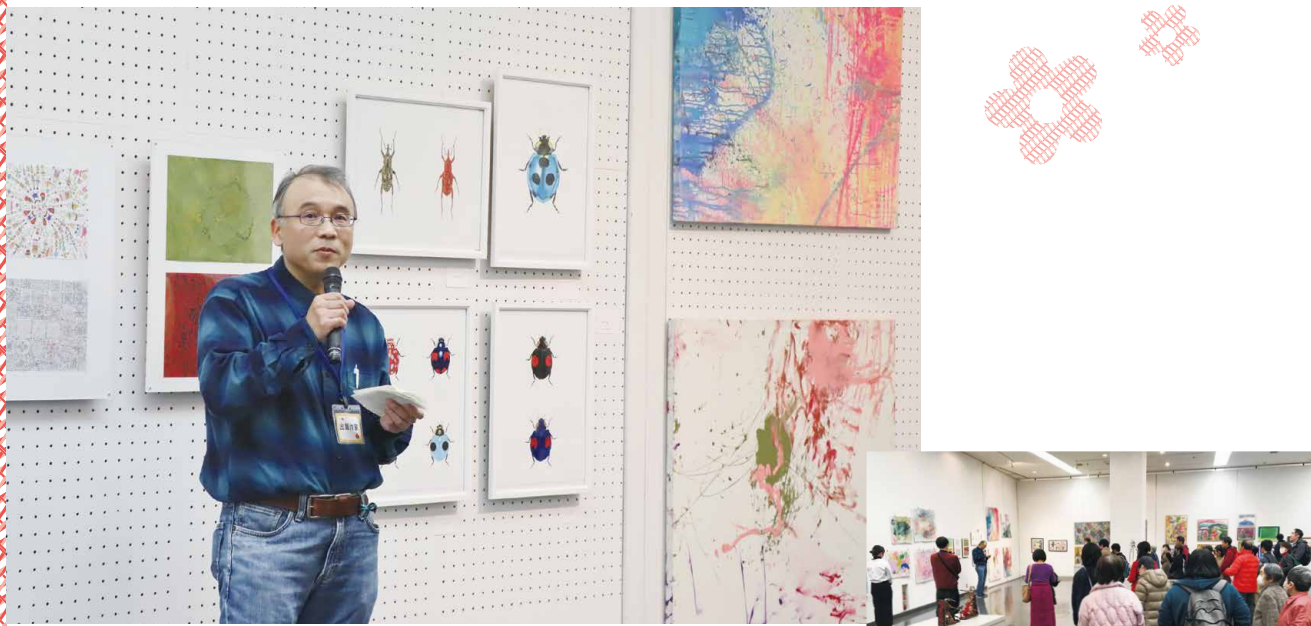


埼玉県障害者アートネットワーク
ブラマイゼロ
TAMAP±0

表現することは生きることそのもの。
その支援は福祉の延長にあり、
その人らしく生きる日々の中で
周囲の理解と関わりにより育まれています。



埼玉県障害者アートネットワーク
TAMAP±0 マスコットキャラクター
「タママップくん」



今年度の企画展では、コロナ禍に中止していたアーティストトークが復活！詳細はP17
横井雅美さんは9年前、事業所への入所を機に出展を果たし、今年度で8回目。「一度、落選したが、気をとり直して、企画展を目標に創作に励んでいます」。創作では過集中により心身に不調をきたすこともあるが、「作品が完成した時は、はつらつとした気持ちです。病気を克服している仲間を見ると羨ましくもありますが、これも試練だと思い、病気をアートに昇華していきたい。人を喜ばせる作品をつくれるようになりたい。それが私の最終目標です」と力強く語っていました

埼玉県障害者アートネットワークTAMAP士〇(通称タマップ)では、県内の福祉施設等の職員をはじめ県の担当者、美術や法律の専門家、作家や家族など、様々な人たちが連携して活動しています。障害のある人の作品は決して特別なものではありません。それぞれの内から生き生きとあふれ出した表現が、多くの人の心をゆさぶりアートとして評価されています。その表現の多くは自己と向き合い、他者と交わり、個性を生かすことができる日常から生み出されています。タマップでは、その一人ひとりの日常と表現に目を向けることを大切に、福祉施設等の職員たちが表現を社会に広げる活動を通して、日々の「支援のあり方」を模索し、その学びを現場に活かしています。そして、発掘した新たな表現と感動を多くの人たちと共有し、未来をひらく福祉とアートの可能性を探求しています。



企画展の展示もタマップ参加施設等の人材育成につながっています

県内の福祉施設や

事業所のメンバーが中心となり、

様々な人たちと共に

支援の輪を広げています。



「ナナホシテントウ」

2023

子どもの頃から昆虫好き。図鑑を参考に色や模様を試作を重ね完成までに十数時間かかることも



事業所の小部屋が創作の場。「その時の体調や気分に合わせて、様々な作風を見せてくれる横井さん。今の私たちのアート活動は、自身の取り組みに真摯に向き合いながらも穏やかな笑みを絶やさない彼の雰囲気そのもの」(医療法人社団双里会 多機能型事業所わっくす職員 豊田亜紀さん)

昨年度はテレビと新聞の取材に対応。今年度の出展作は展覧会のポスターにも採用されるなど、企画展を通して活躍の場が広がっています

横井雅美 Masami Yokoi

埼玉県障害者アート企画展出展作品



「首像～自分・友人、私の好きな著名人」 2016

4ヶ月間で18体制作。以前は彫刻家を目指していた



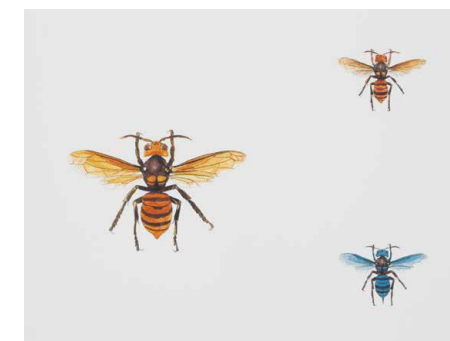
「カエサル設計図Ⅰ～Ⅳ」 2017

密かに描きためていた怪獣のイラストを彫像にするために描いた



「青い電車EF58」 2019

この作品と「オオゾウムシ」は現在、埼玉県障害者アートオンライン美術館で紹介。詳細はP28



「蜂」 2021

近年は水彩による昆虫細密画シリーズで来場者を魅了している

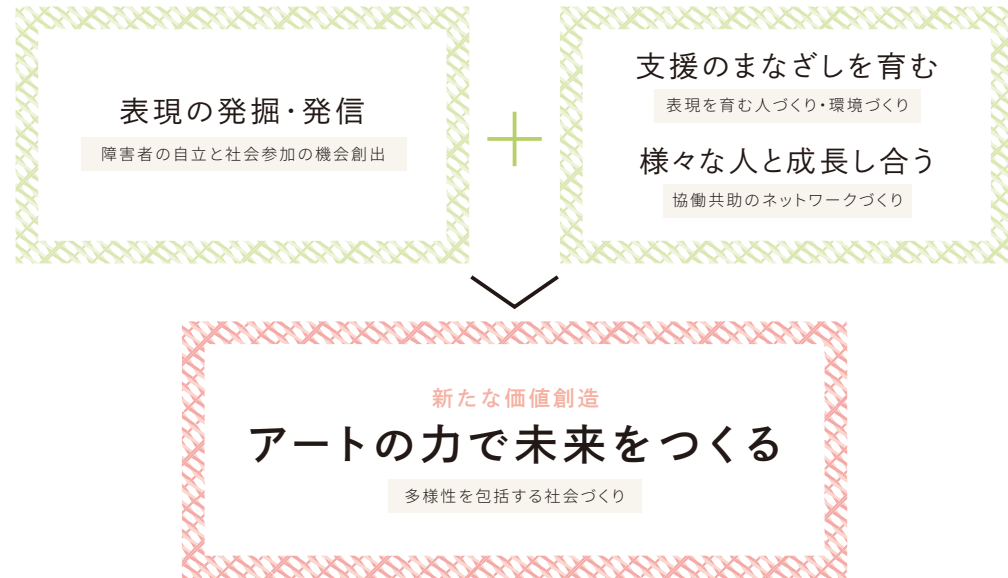


埼玉方式：核となる取り組み

TAMAP±O

みんなで作る展覧会

ポイント



未来を見据え、官民協働でスタート!

2009

障害者の作品の芸術性・創造性を正当に評価する環境を整えることで社会に新しい芸術観や価値観を創出できるのでは——との提言をもとに、行政、福祉、美術、教育等の機関が連携して県主催の「埼玉県障害者アートフェスティバル」を開催。その一環で「埼玉県障害者アート企画展」が始まりました。また、県は「障害のある方の表現活動状況調査」を開始。その調査票から出展作品を選ぶ方法も生まれました。

つながりを礎に支援の拠点&ネットワークを発足!

2016

企画展の実践で培ったつながりを基盤に、国の助成を受けて「埼玉県障害者芸術文化活動支援センターアートセンター集」と「埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±O」を発足しました。

福祉施設職員たちが学びながら継続!

2012

企画展では支援者の育成に重点を置き、学生や福祉施設等の職員が学びながら展覧会を運営するワークショップを導入。さらに実践的・持続的な活動を目指し、福祉施設等の職員が主体となって企画・選考・設営・運営まで一貫して行う方法へと移行しました。

他県から注目される活動へと発展!

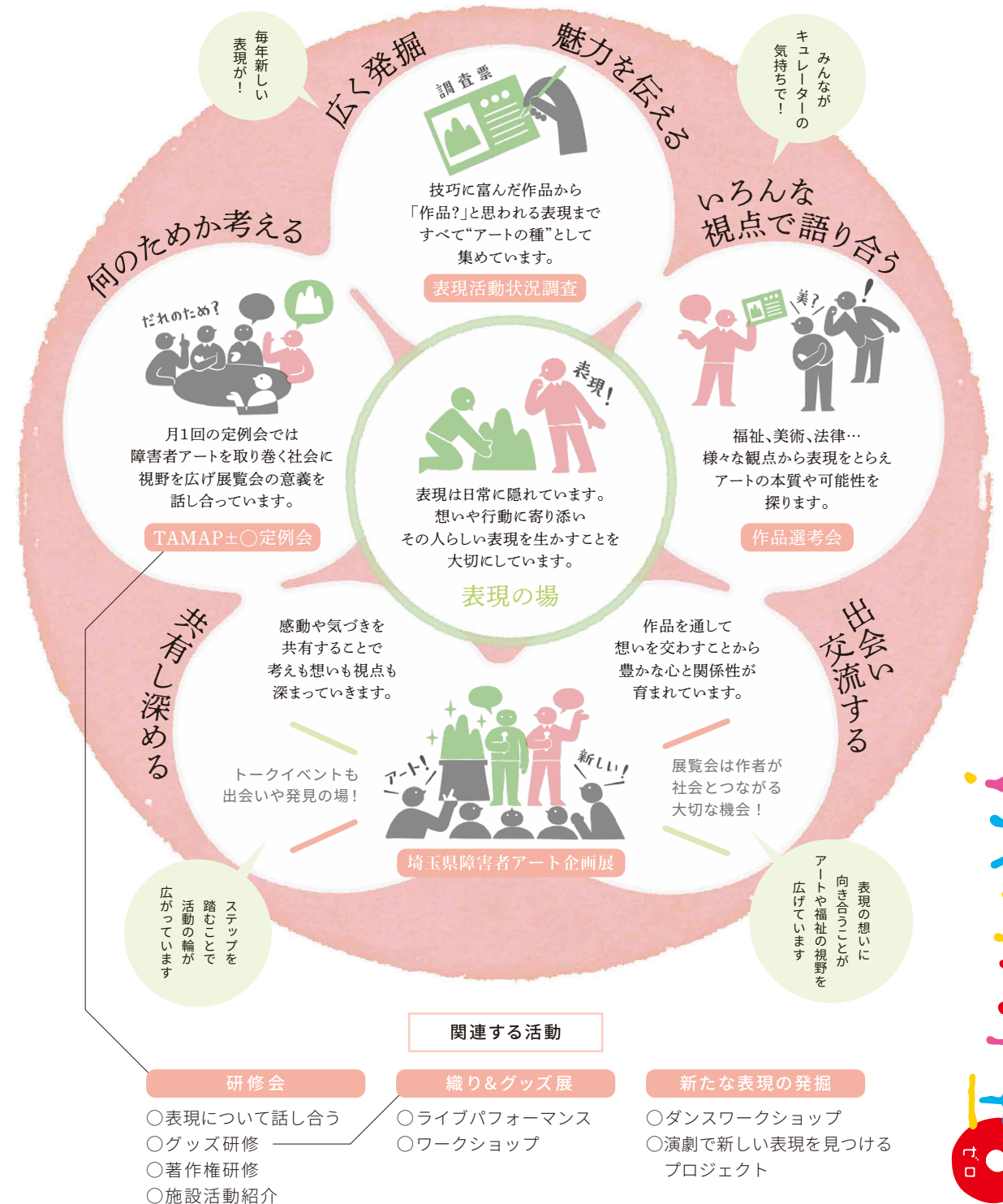
2023

企画展は、障害のある人たちに表現への自信や意欲をもたらし、周囲のまなざしや意識にも変化を与え、活動がさらに深まり、広がり、普及支援事業のモデルケースになるなど他県へも波及しています。

一つひとつの表現と向き合い、みんなで探り、深め、広める——

その展覧会実践を繰り返し日々の支援につなげています。

プロセス



定例会・研修会・施設活動紹介

表現と向き合うことは、支援のまなざしを育むこと。

その魅力を探り語り合うことで、

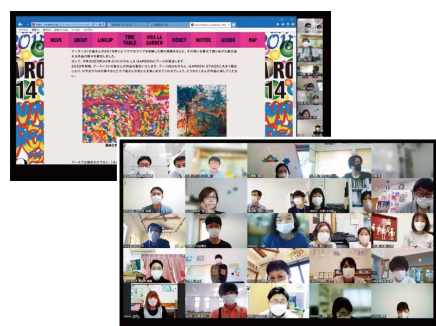
作者や表現に向けるまなざしが大きく変わります。

TAMAP±O定例会

2023/4-2024/3

タマップでは、主に福祉施設等の職員や県の担当者が月に1回集まり、語り合い学び合いながら活動を進めています。「埼玉県障害者アート企画展」に向けては、まずその意義を考えること。作品選考や設営・運営を通しては、多様な視点や表現に触れ、個々の表現をいかに捉え伝えるか考えること。そして、それらの学びを各現場に落とし込み、「支援のまなざし」を育むことを大切にしています。

コロナが5類に移行した今年度、6月の「表現活動について話し合う研修」と9月の本選考会は、久しぶりに大勢で集まり対面で実施。12月のグッズ研修は、対面と中継のハイブリッド形式で。他の研修や定例会は、参加しやすいオンラインで行いました。参加は、34団体。昨年度から3団体増えています。



定例会では県や参加施設のイベント情報等も共有

- 様々な施設の考え方や取り組みを知ることができ、参考になった
- 普段の仕事で学べないことを勉強でき、施設内の表現活動に活かしている
- 自分たちの活動を知ってもらう機会にもなった
- ここでの学びと経験が職員の成長につながっている

研修会

グッズ研修

2023/5-12 5回

福祉施設の商品づくりを支援しているcon*tioの杉千種さん・山口里佳さんの研修では、作者や表現をどう伝えるか、何のための商品化か、考えることを大切にしています。初回は、事例から福祉施設ならではの商品の魅力などを解説。その後は各施設の商品に関する相談をもとに意見交換を重ね、最終回はグッズ展の実践を踏まえ、会場からの生配信で、展示方法や商品改善のポイントを共有しました。



- 相談からコラボや新商品が生まれ、面白さを感じた
- 担当になったばかりだが、一から教えてもらい、自分ない意見も得られた
- 自分の施設の商品を深く知る機会にもなった
- 来年のグッズ展に新商品を出せるよう、焦らず自分たちらしく取り組んでいきたい



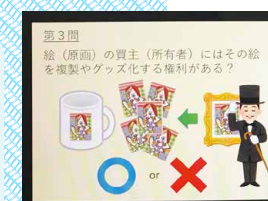
著作権研修

2023/10/11、2024/2/15

弁護士の岩本憲武さん(岩本法律事務所)が、作者と作品を守るための権利や契約について、著作権のほか、商標権や意匠権に関する課題も交え、○×クイズでわかりやすく解説。参加者からの「作品を販売する場合の注意点は何？」といった質問には、法律的な観点からどこに課題がありどう考えるかをアドバイス。作者の意思を尊重して作品を広めるための、基本となる知識と考え方を学ぶことができました。



- クイズ形式で考える時間があったことで、深く著作権に向き合うことができた
- 参加型のクイズで知識を再確認しながら、基本をきちんと押さえることができた
- わかりやすく解説していただき、参考になった
- 新たな発見にもつながり有意義な時間だった



施設活動紹介

2023/8/24

参加施設が各々の表現活動を、動画や画像を使ってオンラインで紹介。

社会福祉法人 啓和会

「委員会をつくり、作品展をスタート」

多数の入・通所施設がある法人内で、タマップへの参加を機に活動の種まきを始め、設立35周年の昨年度、初の作品展を開催。その会場で流した創作風景や、展示風景を写真で紹介しました。「日中活動を考える未来推進委員会を組織し、また、専任者ができたことで表現活動にも意識が向くようになり、アイデアも生まれてきています」。創作活動は週2回。「いちようの木」では陶芸、染色など様々な試みから各々の個性を探っています。「まだスタートラインです。第2回の作品展に向けて一人ひとりの得意を見つけ、作品づくりをしていきたいと思っています」



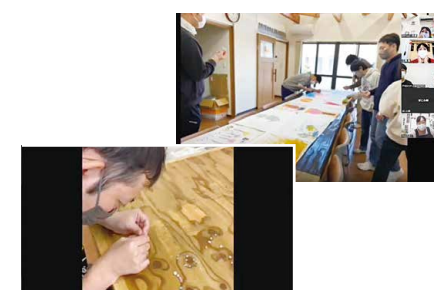
- 多くの個性を引き出す関わりや展示が、学びになった
- 新たなことに意欲的に取り組む職員の想いを感じた
- 自分も利用者の目線に立ち返って取り組もうと思った
- 展覧会で写真を流す工夫などから自分も発想を得られた

みんなで支援のあり方を学び合い、発表者にとっては、活動を振り返りながら発信する機会にもなっています。

社会福祉法人 川の郷福祉会 おれんじ

「リズムのある暮らしから」

畑に囲まれた住宅街に移り3年。利用者13名は皆20～30代の男性です。木の梁に覆われた明るい室内で、グッズ展でお馴染みのピーズシュシュを制作する様子などを映像で紹介しました。「こころをひらいて暮らせる街に」を理念に、一人ひとりとの関わり、仲間の力、楽しい時間を大切にしています。活動では、班分けをせず、全員が4つの作業(資源回収、野菜販売、内職、創作活動)に参加できるように、それぞれのプログラムを組んでいるそうです。地域でのリズムある暮らしから、美味しい野菜と温かな雰囲気グッズや作品が生まれています。



- 家庭的な雰囲気とスタッフの愛情が伝わってきた
- 男性の利用者が種やかに過ごされていたのが印象的
- 野菜販売など地域での様々な活動が参考になった
- 自分たちも発信する機会をつくっていききたいと思った

表現活動について話し合う研修会

2023/6/15

@埼玉県障害者交流センター ホール

活動の悩みなども語り合いながら、つながりを深めてきたタママップ。「コロナが収束したら、また集まりたい!」との想いに応え、第3回の定例会にかえて、みんなで活動を振り返りながら語り合う、約3時間の研修会を開きました。

第1部の前半は事務局が「埼玉県での障害者アートやタママップのこれまでについて」*紹介。なぜ始まったのか、どう継続してきたのかなど、活動の意義を考える上で大切な「埼玉方式」のポイントを解説しました。後半は登壇者5名が施設職員、美術の専門家、県の担当者という異なる立場から活動での気づきやその魅力を語る「クロストーク」。

第2部は、タママップ参加施設のメンバーが地域別に4グループに分かれ、持ち寄った作品の魅力や表現活動での悩み、やってみたいことなどを自由に語る「グループディスカッション」を行いました。



参加者43名

*2009年、県独自に調査や企画展を開始。2012年から福祉施設職員による展覧会づくりを始め、2016年に国の事業化に伴いタママップを発足。詳細はP5



第2部 グループディスカッション

各々の現場での悩みにアドバイスやアイデアを出し合い、活動への希望を膨らませていました。



【グループ発表 まとめ】 ※一部抜粋要約

【北西部】「いろんな活動と想いを開けた」
共通課題：作品の保存、どう作品にするか、写真や映像の見せ方など
○原点を知る大切さを学んだ。推し作家への愛情が花開くと今後も楽しくなると思った
○共に学べる場だとわがや楽しかった

【南部2】「経験が浅い方々は共通の悩みを抱えていた」
作品展に向け無理に制作しているという課題もあがった
○まず何が目的かを考える。本人の表現を見つめるのは職員の役割。一度に全員に目を向けるのは大変。まず職員自身が楽しむことが大事だと思った

【南部1】「前向きな夢や未来を語り合えた」
作家も職員も直に作品の感想を聞ける機会をつくりたいなど希望も語った
印象的な意見：日常で生まれた表現も作品になり得る。「タママップはセラピー」（支援に疲れた時に作品を語り合うこういった時間が大切）
○定例会で悩みなどを聞いてもらい頑張れたことを思い出した

【東部】「自己紹介に時間をかけた分、利用者への愛情が伝わった。みんないろんなことにトライしていることがわかった」
支部で何ができるか→コミュニケーションが第一歩→定期便で情報共有、展覧会時の情報交換、利用者同士の交流（作品発表・ダンス・食事会・野外フェス…）

表現活動状況調査

「これってアート？」も発掘!

2009年より埼玉県が独自に実施している障害のある方の表現活動状況調査では、絵画や造形、ダンス、詩などのほか、作品かどうかわからない表現もすべてアートの原石として発掘しています。「埼玉県障害者アート企画展」では、この調査票をもとに出展作家を選考し、毎年、アートの概念を覆す個性あふれる多彩な作品を社会に発信しています。

提出期日 ※年度により変わります。

第1次期限：6月頃、第2次期限：12月頃
第1次で提出された作品のうち同意が得られたものを埼玉県障害者アート企画展の出展候補にしています。

提出方法

調査票と別紙に内容を記入。メールに添付して送信（郵送でも可）
①調査票（アンケート用紙兼同意書）
②別紙（作品情報記入用紙）※写真で記録できない作品はDVD、CD等でも可

ご本人の了解の上、支援者・団体でも提出できます。詳細は県のホームページをご覧ください。調査票もダウンロードできます。提出前には「情報の活用方法と個人情報の取扱いについて」をご確認ください。



埼玉県「障害のある方の表現活動状況調査」Webページ

お問い合わせは、アートセンター集 (TEL:048-290-7355) または

第1部後半 クロストーク

【テーマ】タママップの活動での気づき。その魅力や今後への想い。
【登壇者】豊田亜紀さん(タママップ支部長/東部)、石平裕一さん(同左/北部)、赤羽幸治さん(同左/南部)、中津川浩章さん(美術家・アートディレクター)、小澤圭佑さん(埼玉県福祉部障害者福祉推進課 主幹)
※コメントの一部を抜粋

事業所のメンバーが制作する言葉にならない表現に関わる中、段々と理解できるようになり、取り上げ方や見せ方でアートとして外に開いていくのだとわかるようになりました。タママップに参加して企画展に選ばれることを重ねるうち、メンバー同士の関係性も変わり、「あいつはどうしようもねえな」と言われていた人が外から評価を受け、尊重されるようになっていきました。



Artist 石平裕一

以前は、アートは上手な人がやるものという先入観を持っていましたが、活動に参加して様々な人の話を聞くうち、単なる上手い下手じゃないと気づき見方が広がりました。選考会では楽しくて余計なことをしゃべり過ぎることもありましたが、そういった経験が学びになり、そこで得たものを職場に持ち帰り共有して、段々と作品を語れるようになっていきました。



わんす 豊田さん

仲間(利用者)の絵のなぐりぎのような1本の線にどんな意味があるのか。当初、中津川さんがわかりやすく言葉にしてくれたことで、その凄さに納得がいき、また、美術館に展示したことで、その線がより生き生きと見えてきました。仲間の身近にいる職員、そういった表現への見方や価値観の変化、評価による気づきを、タママップの活動では、みんなで積み重ねてきました。



工房集 赤羽さん



美術家/アートディレクター 中津川さん

企画展に向けたワークショップのファシリテーターとして、当初は美術と福祉とは言葉の使い方が違うのにとまどい、意見や会話の内容を板書して共通理解を探りながら、対話を引き出すように進めていきました。福祉の現場で生まれている多様な「表現」に触れることで、それぞれが人間にとって表現するとはどういうことなのかを深く考え、ともに学ぶ場になっていきました。



埼玉県障害者福祉推進課 小澤さん

着任前は障害のある方と接する機会が少なく、引き継ぎの際「芸術は個性と多様性に価値を見出し、相互理解を深める力がある」と言われてもピンと来ていなかったのですが、展覧会で鑑賞者が作家の内面を見ていることに気づき、自分も作品を鑑賞する際に作家の内面を想像することで自然と障害のある方への親しみが湧くようになりました。



最後に

- 新しい方が増えたので活動の経緯がわかり良かった
- 各施設で抱えている悩みを共有できて良かった
- 他施設の作品や様子が参考に刺激にもなった
- 背中を押してもらえたような温かさがあった
- 活動に不安があったが楽しみという想いに変わった

タママップでは、各々が利用者の表現の価値や社会へのつながりについて熱く語り、会話のキャッチボールがとてもダイナミックに感じます。アートはわからないという人もいますが、評価を外部に委ねるのではなく、まず自分が楽しいと感じることが大切。それを外へ発信することで共感を得て、評価が社会的なものになっていく。問題行動と思われる表現も、そのプロセスを経てアートになっていくのではないのでしょうか。(中津川)

調査票のポイント

今年度の出展作家、平川寛隆さん(社会福祉法人 めだかすとりのむ)の調査票を例にご紹介します。



写真は作品全体の質感がわかるように、明るい所で正面から歪まないように撮りましょう。光の反射や背景色にも気をつけて! 小さめの絵はスキャニングもおすすめ!

選考会では、一人ひとりの表現を知る「手がかり」が重要。備前に、作品が生まれた背景やどんな作品かを記入しましょう!

埼玉県福祉部 障害者福祉推進課(社会参加推進・芸術文化担当 TEL:048-830-3312)まで

作品選考会

2023/7/18-7/27,9/5

日常の表現の中にアート原石が隠れています。

多様な視点を交えて新たな表現を発掘することで、
アートの可能性が広がっています。

「埼玉県障害者アート企画展」の出展作家を決める選考会では、埼玉県が毎年実施している表現活動状況調査の調査票（詳細はP9）をもとに、福祉施設や県の職員、美術の専門家、弁護士など立場の異なるメンバーが多様な視点や価値観を交えて選考を行っています。調査票や本選考会で語られる福祉施設職員たちの言葉から、言葉でのコミュニケーションが難しい作者の表現が、どのように生み出され、どこに意識が向けられているかなどを知ること。また、選考での対話や議論から、異なる観点や感性を知ること。その、多彩な表現に触れ、感動しながら、みんなで多様な視点や価値観を共有し、選考することが、それぞれの視野を広げ、障害のある人にとって人間にとって「表現とは何か」と考える、とても大切な時間になっています。

選考方法は毎回、状況に合わせて試行錯誤しています。今年度は、昨年度同様、まず7月に各施設や個人でミニ選考会を実施。送付した625名分の調査票（デジタル画像）*をもとに最大80名を選出してもらい、得票上位の76名を仮決定。そして9月、110名を上限に残りの出展作家を検討する本選考会を開きました。コロナ禍はオンラインが中心で対話も難しい状況でしたが、久しぶりに全体で集い、前半は、各々で選んできた作家1名の推薦理由を語り、後半は、出展候補を絞る議論を行い、最終的に103名の出展作家を選出しました。

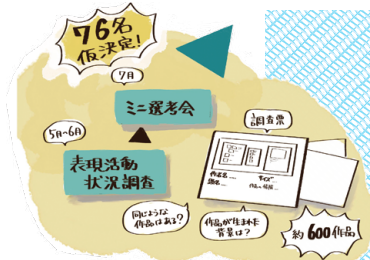
*選考では個人情報取扱の誓約を交わし情報を共有

本選考会参加者：中津川浩章（美術家、アートディレクター）、前山裕司（新潟市美術館特任館長）、小澤基弘（画家、埼玉大学教育学部教授）、酒井道久（彫刻家、埼玉県立大学名誉教授）、高田悠希子（戸田市立新曽中学校美術教諭）、若本憲武（弁護士／若本法律事務所）、山口里佳（コーディネーター／con'tio）、杉千穂（同左）、武居智子（編集者）、埼玉県福祉障害者福祉推進課2名、福祉施設等52名

企画展では本選考会のグラフィックコーディングを掲示して選考の様子を公開



◎埼玉県障害者交流センター ホール
本選考会には61名が参加！
約3時間かけて最終選考を行いました

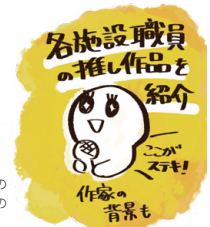


ミニ選考会ではタマップのメンバーそれぞれが、施設の事情に合わせて実施。表現を語り合う時間したり、他の職員を巻き込んだり。それぞれの工夫により、「みんなでつくる」埼玉方式が福祉の現場へも浸透しています



本選考会

前半は、みんなで“推し”を語り、作品の見方が変わるワクワクとした時間でしたが、後半は、選考の厳しさを知り、責任の重さをズシと感じる時間になりました。選考での主なtopicをまとめます。



日頃の作者や表現へのまなざしを感じる熱のこもった発表でした

みんなで“全体”を考えよう！

一般の公募展とは違う、埼玉独自の企画展。いい作品を選ぶだけではない、展覧会がもたらす作者の自信、周囲の変化、表現活動の活性化といった支援的な意義と、表現をどう発信し、アートとして広めるかといった普及の意義の両面を、事業の目的を踏まえて考慮しつつタマップとしてどうするか——みんなで企画展全体を考えて選考することを目指しました。



ちょっと気になる ボーダーな作品

キャラクターを模した作品、他人が撮った写真と似た作品、個人情報に紐づく作品など、誰かの権利を侵しそうな作品について、弁護士の岩本さんからの「作家を守るためにも慎重に検討する必要があるのでは」との指摘が、展覧会のあり方を考えるきっかけになりました。規模や公共性を考慮別の作品を選ぶという方向性が意見として示され、また、「創作は萎縮させずに続けて」「別の発表の機会もつくり広げていこう」とのフォローがありました。



鮮度が落ちる？ 常連作家の作品

埼玉大学教授の小澤さんから、「常連作家の作品は、質は高いが（自分にとって）鮮度が落ちる。作品を直感的に選んでいるので、そこどう折り合いをつけるかが難しい」との意見が。また、支部長の豊田さんからは、「新しい作品が見たい、新しい人に参加してほしいとの想いで、常連作家の作品を外してしまっていたが、その作品から受けた最初のインパクトを、新たなお客様も受けると思うと、どの視点から選んだらいいか考えてしまう」との意見もありました。

落とすミッション、選ぶ責任

作家を絞らなければならない状況の中、彫刻家の酒井さんは、「（推薦された作家は落とさず出展作家の）展示作品数を減らしては」と提案。監督の中津川さんは、「作品一点では個性が伝わらないことがある」「作品が良くないから落とすのではない。選ぶ責任があり、落とすミッションがある」と意見。新潟市美術館特任館長の前山さんは、「先ほど作品を見て、もう少し展開があってからいいかと思った」と自ら選んだ作品を選外に。その後、美術の専門家たちが候補の作品について、「繊細さがある」「いや、グループ感がない」「色むらが個性的」「そんなに響かない」「模写でも独自の解釈がある」「多様性の表現が集う展覧会の裾野を広げる作品だ」と次々に批評して選考を進めていきました。

今回は、自由に意見を交わす難しさがありませんでしたが、専門家の方々の発言から多くを学び、「みんなでつくる展覧会」として、みんなでキュレーション（コンセプトを考え作品を選び新たな価値を発信）することを目指す、一歩になりました。



芸術家の方々と福祉職の私たちが異なる考え方があっても納得し、双方の観点がいい方向に結びつくことに期待の持てる内容だった

・どうしてその作品を選ばなかったの理由も明確に教えてもらい、今後どのように作家の良さを引き出せばいいかのヒントをもらえたと思う

・選考する難しさを肌で感じ、どれも真剣に制作されたものだから欠点を探すのではなく、展示全体のバランスを見ながら決めていくことが大切だった

・次年度は「選考すること」について深める話し合いを設けるとより良い選考会になると思った

・対面での選考会は初参加。程良い緊張感が刺激的で貴重な経験になった。作品を選ぶ上での視点や県の代表として選考する責任と熟意を感じた

・素晴らしい作家が多い中、選ぶ難しさを感じた。中津川さんがおっしゃっていた「人のある意味落とすという事は責任を伴う」ということを学んだ





「無題」新田新汰

@埼玉県立近代美術館

埼玉県障害者アート企画展

2023/11/29-12/3

人間にとってアートとは、表現とは、障害とは…

多様な表現で本質を問いながら

社会に新たな価値を創造しています。

障害やアートの概念を覆す多彩な表現を発信して社会にその可能性を問い続けている本展では、選考会で選ばれた作品をただ展示するのではなく、一人ひとりの個性や表現の魅力がより伝わるよう、また、表現の多様性や作家の層の厚さが伝わるように展示構成を考え、福祉施設や県職員のタマップメンバーが協働で設営をしています。その「みんなでつくる」埼玉方式により毎回、表現に込められた想いや創作への情熱と、それを取り巻く温かいまなざしにあふれた展覧会が生まれています。14回目を迎えた今年度は、103名の600点を超える作品を展示。さらに、同じ埼玉県立近代美術館の地下1階で、「アートミーティングatさいたま国際芸術祭」と「南関東・甲信ブロック合同企画展2023」も開催しました。一般展示室1~4を巡り、障害のある人たちの表現の力強さとその活動の広がり、多くの来場者と共有する大展覧会になりました。



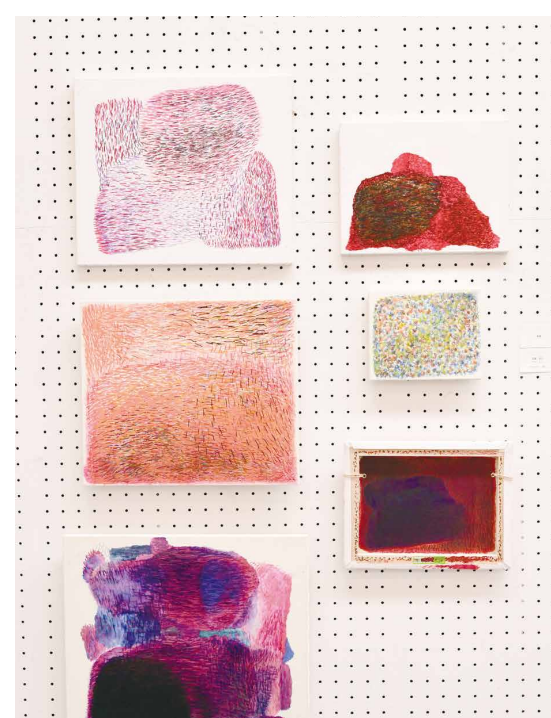
3展合同のチラシは6面構成で作成



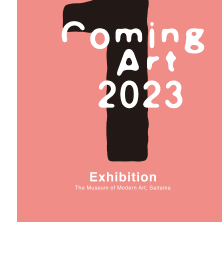
「ナミテントウ」横井雅美
模様の多様性を独自の配色で表現



(上)「五人の女子小学生」坂庭儀信 (下)「楽器シリーズ」横山涼



「無題」高橋裕子



Coming Art 2023
第14回埼玉県障害者アート企画展
カミングアート2023

埼玉県障害者アート企画展は、いわゆる一般的な障害者アートの公募展とはかなり違った展覧会です。作品のクオリティが高いことに加えて特筆すべきは「表現のバリエーションが豊富」なこと。それはなぜ、どうしてなのか。障害がある人たちの個別の「表現」に関する詳細や考察を写真付きで記した埼玉県独自の「表現活動状況調査」の取り組みも大きいです。オーソドックスな絵画や立体作品だけではなく、“一見理由はわからないが続いている「行為」”や「収集しているもの」などもその人の「表現」の可能性として捉えるなど、一般的な「アート」の枠をはみ出す実に幅広い豊かな「表現」の数々がとても魅力的で面白いのです。展示する作家・作品のセレクトには、美術の専門家だけでなく福祉現場で働くスタッフ、弁護士、デザイナーなども加わり、それぞれの視点から多様な価値観を反映したセレクトになっています。「なぜ?」「どうして?」「これって、アートなの?」——「芸術」という枠を超えた人間のやむにやまれぬ「表現」の多様性。それが一望できる展覧会です。

本展監修 中津川 浩章



「津波の虫眼鏡」石川直人



「Monsters」森羽虫



「青龍」阿久津英二

niigata ← saitama

アートミーティング at さいたま国際芸術祭
さいたま国際芸術祭2023 市民プロジェクト「創発inさいたま」



さいたま市のアーティスト6名と新潟市のアーティスト7名を交えた初の交流展覧会。さいたま国際芸術祭2023市民プロジェクトの一つ、「創発inさいたま」のキュレーター企画事業として開催されました。新潟市では、埼玉県の選考手法を参考に、2020年から調査票をもとにした展覧会を開始しています。「アーティストそれぞれの作品は独自の表現ですが、ときには似たような関心が見えてきます」と監修の前山裕司さん。新潟の風土を感じる作品もあれば、かつて埼玉の選考会で話題にあがった表現を思い出す作品もあり、表現の源泉に誘うような新潟と埼玉の個性が交わる展覧会でした。



1都5県（東京・神奈川・埼玉・千葉・長野・山梨）の障害者芸術文化活動支援センターによる合同展。昨年度、東京芸術劇場で開いた展覧会のテーマと内容を踏襲し、多彩な表現や商品化の取り組みに加え、各センターと作家や施設などとの関係性を紹介しました。関連イベントでは、神奈川県「OUTBACK アクターズスクール」のメンタルに不調を抱えるメンバーが、自身の経験をもとにつくった演劇の一部を上演。また、埼玉県金澤一摩さんが自作の人形劇を実演。会期中は県外からも多くの出展作家が来場し、一人で来た作家さんが埼玉の作家や来場者と楽しげに会話する姿も見られました。



人形劇
「おばけのゴスト」
金澤一摩



中央が金澤さん

Counter Point
「カウンターポイント それぞれの寄り添うかたち」
海関東・甲信ブロック合同展覧会2023



「無題」斎藤健視



「七脚脚の組み子と椅子」相澤太郎



「ごーつーふノート」町田真春

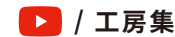
関連企画・ギャラリートーク

2023/12/2

アートミーティング at さいたま国際芸術祭

「表現の種をまく さいたまから新潟へ」

埼玉県立近代美術館の学芸員時代から企画展に携わりこの交流展を監修した前山さん、前山さんと共に新潟で支援活動に努めている根木さん、企画展の監修を務める中津川さんの3名が、埼玉独自の展覧会づくりの経緯や魅力、そこから何がもたらされてきたか。それを参考に新潟ではどんな活動を目指しているのか。また、障害者芸術文化活動支援センターは地域でどんな役割を果たしているか。「障害者アート」という括りをどう捉えているか。そして、障害のある人の表現の可能性について、それぞれの考えを語りました。



約1時間のイベント映像を
「工房集チャンネル」で配信中!



右から根木さん、前山さん、中津川さん、司会の宮本（アートセンター集）



企画展の展示会場で開催

新潟市美術館 特任館長 前山裕司さん

褒め言葉として埼玉では、展覧会にゴミのような作品が出てくる。出てくる場になったことが凄いい、良いこと。今回新潟から出展した、新聞に穴を開けた作品は、ここが許容できる場だから選びました。調査票は、基本的に誰も排除しない。それは、美術にとっても大事ですね。また、その調査では、他を知ることができる。新潟でも、そこから施設間のつながりができたらと思っています。ボーダレスな表現で、いろんなものが、そこに入る。そんな自由な世界は、社会にあまりない。それが、境目など何かを壊す力になっていくと思って、みんな楽しんでみましょう。

アーツカウンシル新潟 プログラムオフィサー 根木一子さん

新潟では、シールを貼り重ねて作品を作っている小学生が出展してくれましたが、地域の絵画展にはシールであることが理由で応募できなかったそうです。新聞で「調査票ではどんな表現でもいい」と知り応募して下さったと聞いて、いろんな表現が許容される場として様々な方に認知してもらおうという活動の未来が見えた気がしました。障害のある方が美術館に来ている光景が、いろんな方のアクセスを広げ、また、その作品が地域の様々な場に入り込むことで、美術の概念を変えるなど、いい影響を与えていると感じます。今回の設営では作品を語るタマップの方々の会話が新鮮で、新潟でもネットワークを広げ福祉施設の方々とアートを通して交流したいと思いました。

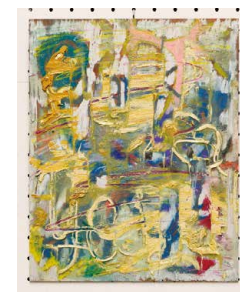
美術家・アートディレクター 中津川浩章さん

福祉の現場には宝物と才能がまだまだ埋まっている。毎年、そんな期待感を抱かせる展覧会になっています。ポトムが広がり、クオリティが上がり、多様性が増えています。作品選考では、既存の価値基準に頼らず自分の感覚に従い、思い迷いながらも障害者アートの概念をあたらしく開き、パブリックな場で展示することの意味を問い、みんなで展覧会を作り上げてきました。人間の根源的な部分を揺り動かす力があり、人間が表現するとはどういうことか考えさせられる、資本主義社会での有用性の意味を揺るがすような作品の出現を楽しみにしています。

※当日のコメントから抜粋して編集しました



「Untitled」出羽まいる



「You will miss all the fun!」田中裕貴



「JR機関区」福島尚

アーティストトーク

2023/12/2

出展作家が主役となるアーティストトークは、作家と社会をつなぎ、表現をより深く知る機会です。今年度は4年ぶりとなって17名もの作家が参加。2回に分けて行いました。それぞれ作品の前に立ち、自身の言葉で、また、家族や施設職員の説明により、作品に込めた想いや表現が生まれた背景、創作における夢や希望などを語りました。

コロナ禍の規制が解かれた今年度は、施設や家族での来場も多く、イベント以外でも在廊する作家が、来場者に作品を説明する姿があちこちで見られました。イベントの片付けを手伝ってくれた作家もいて、会場全体が立場を問わず心を通わす和やかな雰囲気になっていました。



野村真優子さん：普段はうつ伏せで詰めている。「家庭ではゴミのように扱っていましたが、展示していただき、本人にはかけがえない経験になっています」（母）



切る・ちぎる・丸める・差し込む・結ぶ。彼女の「得意」が、この作品には沢山詰まっている。ある日、紙を小さくちぎってゴミ箱に捨てた。そのゴミ袋を外して居場所に持っていき、「結き」を始めた。新しい袋を渡すと、その中に土台となる紙（あまり好みでない紙）を大胆に入れて結び、さらに横から破いてまた紙を詰め、パンパンになると新しい袋を要求し、作っていた作品を丸ごと入れて崩し、また結ぶ。これを何度も繰り返して、大きな作品にしていく。これが今の彼女のテーマである。
——展示キャプションより



Victor Tanさん：「父の愛“Father's Love”では人生の意味を表現。20代で視力のほとんどを失い、自分の表現を模索しワイヤーに行き着いた。「空間に描くように」制作。「アートは可能性だと思います」



なお丸さん：新作「カースドラゴンウォーズ」は女戦士が勇者と龍を操りバトル。「戦争にもルールがあるということを示したくてつくりました」「生きることを作品をつくり続けて証明したい」



杉田大河さん：「ドラゴン」は初の大作。「明るい所は明るい色とバランスをとって自分なりの色を使っています」



山崎利之さん：パンダが大好き。一つひとつ描いて切り抜き重ねて作品に。白のパンダも白色で丁寧に塗られている



大野麗果さん：表現活動を始めた昨年は丸ばかり。今は緻密でペンダコも。写真を見て独自にアレンジ。「朝ごはんとお菓子の絵を描きました」



及川礼さん：「夜明前の海」は「夜うなされる症状があり、次の日に楽しくなればいいな」と思って頭の中で見始めた夢の景色です」



関口直子さん：個性ある人形を「心を尽くし」創作。「対話するように眺めていると、なりたがっている姿が浮かんでくるのです」



Coming Art 2023
第14回埼玉県障害者アート企画展
カミングアート2023



Fumiさん：様々な車種を展開図から制作。タイヤも動く。「マイナーチェンジされた車をミニカーにしたくてつくっています」



箭内裕樹さん：仕事の時間に一心不乱に描いているペン画。当初は黒一色だったが今はカラフル。繊細な線の中に笑顔のモチーフがたくさん



吉田憲司さん：紙類の余白に日付や誰かの名前、住所などを書くのが日課。当日はパンフを手元に施設をPR!



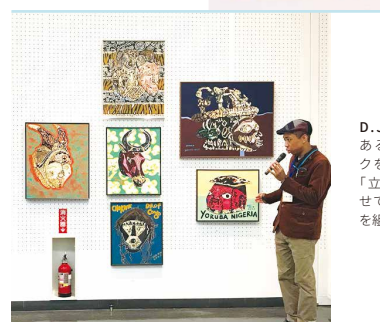
用田祐一郎さん：ホワイトボードに描いた絵を先生に褒められ描くようになった。「思考の外側を視覚化して自分で楽しみたいと思い描きました」



山岸太誠さん：2年前に描き始めた。「細かく描く」を重視。「昨年は戦車、今年は人を描いてもらって飾ってもらえてうれしいです」



柴崎優翔さん：コロナ禍、動物園に行けずiPadで細物まで描くようになった。今は動物園に勤務。「動物の種類を増やし、手書きにも挑戦したい」



D.J.E.J.さん：家にいるアフリカのマスクを見ながら制作。「立派なお面に合わせて背景にも色と色を組み合わせました」



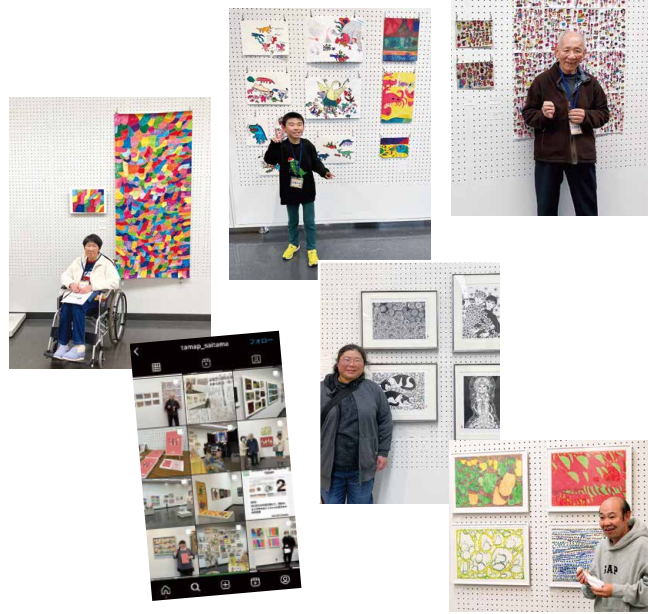
EMIさん：ハートや動物などのモチーフが連続する大作。「イメージを膨らませて描いています」。どんな絵になるかは想像がつかないそう



情報発信

会期中、タマップのInstagramでは展示や出展作家の様子を配信。会場では作品集などの販売のほか、タマップの活動をパネルで紹介し、作家の創作風景を映像で流しました。地元の埼玉新聞やテレビ埼玉をはじめ、メディアには毎年のように取り上げていただき多くの反響があります。今年度は3展同時開催でより関心が高まり、毎日新聞の文化面にはギャラリートークの内容を中心に、障害者アートの動向や意義を伝える記事が大きく掲載されました。

毎日新聞2024.1.7朝刊



鑑賞支援

毎回、福祉施設等に来場を呼びかけ、障害のある人たちの鑑賞支援にもつなげています。仲間の作品を鑑賞することが、表現活動への意欲や出展作家の自信になり、また、同行した職員が表現や活動を理解する機会にもなっています。今年度は、視覚に障害のある方も来場され、視覚に障害のある人との言葉による鑑賞やアクセシビリティについて考えるきっかけになりました。



企画展の振り返り 来場者数 1,700名

今年度は、運営に学生ボランティアも参加。3展同時開催で来場者数は過去最多を記録しました！



タマップ参加施設等メンバーの感想

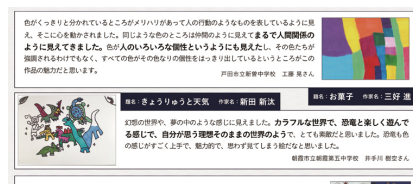
- 新しい作家も増え見応えのある展示になった
- 規模の大きさと客層の幅広さに驚いた
- 選考写真と実際の作品との迫力の違いに驚いた
- 作家が会場で皆に声をかけてもらい誇らしげだった
- 両親に自身で作品を説明でき喜んでいた
- 出展後、さらに創作意欲が増したよう
- 出展者以外も鑑賞後、モチベーションを上げている
- 企画展が利用者の大きな目標になっている
- 視覚障害の利用者と初めて鑑賞を体験できた
- 関連する病院が見学ツアーを企画し大勢見学できた
- 障害のある人と多くの人が自然と関われる貴重な場
- 学生や他県との交流もこの規模だからこそと感じた
- 新潟の作品は埼玉と違う作風で作家の刺激になった
- 一から皆で作り上げていることを改めて実感できた
- 利用者や作品へのスタッフたちの愛が感じられた
- 表現の捉え方を知り改めて支援のあり方を考えた
- 展示位置が少し違うだけで見え方が変わり驚いた
- 設営の経験が施設での展示にも役立っている
- 刺激され施設内でも展示する動きが出ている
- アートは額に入れて飾るものといった観念を覆す作品がたくさんあり、固定観念にとらわれず、今後多様な作品を見てみたいと思った(県担当者)

来場者の声 ※アンケートより抜粋

- 力強い表現、無心になる美しさ、涙があふれてきました。あらかずことの楽しさ、思いを形にするって何だろうと自分に問いかけながら見させていただきました。
- すべての作品が生き生きとしていて、作品がその人の人生となっていると思いました。生きる意味や喜びが一つひとつに現れ、丁寧につくられているということは、皆さんが丁寧に生きていることなのだと思います。
- 会場全体を埋めるその数と多彩さに引き込まれました。クオリティを取ればもう少し数は減るかもしれませんが、「やむにやまれぬ」表現の多様性が会場全体を覆う魅力だったと思います。
- Fumiさんが制作する姿と、会場の温かい雰囲気印象に残りました。特に子ども(4歳)は熱心に見ており、帰宅後も「作家さんが制作する姿が格好よかった！凄かった！僕も作りたい！」と話し工作に励んでいました。
- 作家お二人と会話しましたが、画面に描きたいものが自然に現れそれを描くだけ、迷いもないと。凄いです。打ち込めるものを持てる充実した日々は尊いですね。
- アートという形で表現できることがとても羨ましく思います。息子にも障がいがありますが、楽しく過ごす生きがいを見つけてもらえたらどんなに幸せか。このアート展を通じて、将来に希望が見えた気がします。

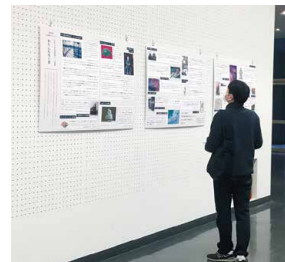
作品鑑賞プロジェクト「わたしたちの目」

今年度は、教育普及の取り組みとして鑑賞体験企画も実施。県内2校の美術部の中学生による作品鑑賞の感想文を、パネルにして紹介しました。それぞれの視点や作品の魅力が瑞々しい言葉で綴られ、その豊かな感性に感動し涙する作家の姿もありました。



戸田市立新曾中学校 美術教諭 高田悠希子さん

県内から沢山の作品が集まるアート企画展ならではの鑑賞の取り組みをという思いから、中学生が主体となりお気に入りの作品を選ぶ鑑賞企画を提案しました。生徒たちは出展作品を画像で鑑賞し、選んだ1作品に対して、自分なりに感じ取ったことを自由に言葉で表現しました。作品からまだ見ぬ作者の思いを推測したり、表現のあり方に興味を持ったり、自分とは異なった感じ方、表現の良さを見いだしたりしていました。この企画を通じて、生徒から作品・作者へのまなざしのほかにも、生徒たちの感じ方・世界とまだ見ぬ誰かのまなざしとの出会いが果たされたいと思っています。



織り&グッズ展

2023/12/16-22

来場者数 1007名



何のため誰のため…

みんなで問いつけた先に

たくさんの輝きが生まれています。

@工房集ギャラリー

今年度も工房集を会場に13の参加施設が商品化した織りの袋物や小物、木工、スタンドグラス、陶器の置物、絵画をデザインした文具など様々なグッズを展示・販売しました。ギャラリーでは、奥の壁に織りの個性が際立つバッグを展示。所々にリースなどを飾りクリスマス感を出す一方、天井からは爽やかな色合いの風呂敷を吊るし軽やかさも演出しました。商品には、研修を経て改良されたグッズに加え、昨年度の反響に応えた意欲的な新作や季節物も多く、全体的な商品の充実と品質の向上を実感。会場ではリピーターをはじめの人も、各施設が書いたPOPを読んだりお客さん同士で会話したりと、時間をかけて選ぶ姿が多く、売上は過去最高を記録しました。



会場では作者とお客さんが会話する姿も。左は自身の作品について語るスタンドグラス作家の荒井亮さん

商品のクオリティの高さに驚いた

織り&グッズ展 ツグズムズ16

すてあーず



ヘンテコどうぶつさんの帆布ポーチ&ポシェット

子ども病院の親子向けに開発。サイス感と手織りのハギレやリサイクルボタンを使ったクマ、ウサギ、イヌ…のアプリケが大好評。紐通しが左右にありポシェットにも変身♪

久喜けいわ



あいうえおボード

「誰かの役に立てたら」と山口開子さんが針一針刺繍した温もりを感じるコミュニケーションツール。ご本人もこれで気持ちを伝えていきます。丸めて携帯もOK。研修の助言を受け裏地は改良中!

嵐山郷



さをり織り イヌ用リード

彩り豊かな紐の活かし方を研修会で検討を重ねて商品化。丈夫さは実証実験済! 今後の売り方に期待がかかる新作です

ゆめたまご



手織りピンクッション

三角ボーディーとお顔がcute♡ミシンに吊るす発想から生まれた今年度の人気マスコット。織り地のカラーバリエーションも手に取り選ぶ楽しさに



様々な事業所の商品が見られて参考になった
ディスプレイやPOPの大切さを学ばせてもらった



出展数が多く華やかさが高まり時間をかけて隅々まで見たくなる展示になっていた

作家主体のライブパフォーマンス&ワークショップ

2023/12/16-17

◆僕がひとつ、あなたのことをぼやいてみせましょう

日々、朗らかな名言を綴っている金子隆夫さんが、対話からお客さんの隠れた魅力を文字と絵で表現



◆たのしいお人形作り

人形作家の関口直子さん手製のかわいいキットをもとに、それぞれの分身のようなお人形を創作



◆革小物作り

すてあーずの高野博史さんの手ほどきで、細かい作業を経て小さな革が、好みの模様と色で彩られたブローチに



◆スタンドグラスのオーナメント作り

工房集の作家荒井亮さん、伊藤裕さん、片波見知代さんの手ほどきで、お子さんも自分の作品づくりに夢中



今年度は、相談や広域センターのつながりで委託販売が増え、個人作家のコーナーを設けて展示。売上もあり、ご本人やご家族も喜ばれていました。

2023 topics



造形作家・花鳥星空さんの干支(辰)の置物。グッズ展に合わせて粘土で制作。限定3体で即完売!



山梨県のデジタル画家・齋藤飛鳥さん一家の商品化プロジェクト「◎あ〜ちゃんず」からも多数出品!



企画展の常連でもある点描画家石井章さんの商品。どれも布地に手描きの一点物!

誰もが輝きを秘めている。それが表現となり

人の心を動かし、生きる力になっています。

新たな可能性を探求する



©埼玉県障害者交流センター

タマップダンスワークショップ

2023/8/24、10/18、2024/1/24

2017年度より、障害や年齢の枠を超えて活動するダンスグループ、ベストプレイスを主宰する竹中幸子さんを講師に招き、身体表現の発掘とその魅力発信を続けています。今年度は、コロナ禍から心待ちにしていた初参加の方が多く、初回には7団体から52名(内支援者24名)が集い、3回で100名以上が参加。「次が楽しみ」といった声も多く聞かれました。このワークショップでは、みんなで体を動かすコミュニケーションを通して、それぞれの気持ちや表現が引き出されたり、意欲が芽生えたりしています。今年度は、視覚障害者施設の参加もあり、最後の回では、触覚や見えないを感じて動く試みの中で、言葉を掛け合ったり手を取り合ったりする関係性も育まれていました。

NPO法人みのり 領家グリーンゲイブルズ 畠山邦男さん
視覚障害者が参加できるか最初は不安があったものの、本当に素晴らしい体験をしました。まず、講師の指導が非常に明確でわかりやすく、初心者でも楽しめる内容で、皆身体の可能性に驚かされていました。また、施設や障害を超えた参加者同士の交流が行われ、励まし合いながら一緒に踊り、心地よいつながりを感じることができました。異なる障害者が互いに表現し合うことで、視野も広がったと思います。ダンスの楽しさと奥深さを再確認し、自信を持って表現することの大切さも実感でき、自己成長を促進させてくれる素晴らしい手段だと認識を深めることができました。

私たち視覚障害者は抽象的な動きが非常に苦手です。(「によるによる」といった言葉よりも)「ジャンプ!」とか「足踏み!」など体を実際にどのように動かすかを指示してもらった方が動かしやすいので最初は大変だったしごちなかつたです。でもだんだん慣れてきたら他の作業所の方との交流もできましたしダンスも楽しんでました ——参加施設ブログより



・昨年度舞台公演で踊った仲間の再会を喜ぶ姿や、最初は戸惑っていた方が笑顔になっていく様子を見て、改めて豊かな刺激になっていると思った



げきだん
太陽
1月12日(金)
2じから
きらっし館にて
祝賀会や挨拶/観劇希望の方

©川口太陽の家



参加アーティスト 大石将弘さん(俳優)

職員と仲間の皆さんとの関係や、彼らが生み出している場がとても豊かで、「自分にできることはあるのだろうか」とはじめて訪れた時は戸惑いました。結局私がやったのは、知り合い、ゆっくりと関わり合いながら、すでにそこにあった演劇の種を拾って、皆で演劇の形にしてみることを提案する。それだけだったと思います。職員の皆さんは、素晴らしいプレイヤーであり、仲間を輝かせる演出家に私には見えませんでした。毎回予想外のことが起きても、それを受け入れて今を柔軟に変容させていく。予定調和でない、一瞬一瞬が輝く演劇が、あの場所にはありました。

演劇で新しい表現を見つけるプロジェクト

2023/7/14-2024/1/12 5回

今年度は演劇を手法として、新たな表現機会の創出を目指した試みも行いました。福祉施設に舞台俳優の大石将弘さんが通い、仲間(施設利用者)と交流を重ねながら「日常と地続きで楽しめる演劇的な表現」を見つけて楽しんでいく企画です。7月、大石さんと仲間が顔合わせをすることから開始。8月には「最高の一日」をテーマに出し合ったフレーズをつなぎ物語を創作。9月と10月はグループで考えた物語を即興で演じました。さらに「ここまで盛り上がり発表をしないわけにはいかない」と他の仲間も巻き込み急遽、「劇団たいよう」を結成。1月、約20名の参加者(施設職員含む)が3グループに分かれ、施設内でワークショップと発表会を開きました。

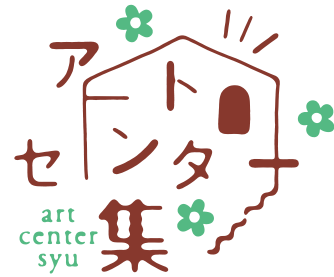
コーディネーター 藤原顕太さん(一般社団法人ベンチ)

施設の中と外をつなぐ役割から、企画に関わらせていただきました。演劇は、コミュニケーションの芸術と呼ばれています。福祉現場の中の人だけでは気づきづらいですが、現場で日々行われているコミュニケーションや支援行為には、実は想像力豊かな表現が詰まっています。この企画ではアーティストが施設に何回も滞在することで、その視点から現場の豊かさを再発見してもらうことを狙っていました。様々な場所を「演劇的な場」にすることに長けた俳優の大石さんと、川口太陽の家の仲間や職員の皆さんとのコラボレーションからは毎回、奇跡のような展開が生まれていました。

・演技でない所作にも意味付けをするなど誰もが役割を持って参加できるよう導かれていた点と、言葉で説明できない仲間のできることを別の仲間が提案したり、フォローしたりする様子が印象的だった。職員の支援の仕方にも演劇的要素や価値があると評価してもらえたことうれしかった



アートセンター集 相談窓口からのご報告



「創る」「深める」

「広げる」「守る」をサポートしています。

埼玉県障害者芸術文化活動支援センター アートセンター集には、障害のある人やその家族・支援者をはじめ、企業や教育機関など多方面から年間700件以上の相談が寄せられています。今年度は、工房集や埼玉県の芸術文化の取り組みを通じて「福祉の仕事の意義や可能性について講演してもらえないか」という相談も多く寄せられました。また、コロナ5類移行に伴い、アトリエ見学の依頼が増加。福祉、教育、行政、企業など様々な分野から、講演同様、人材育成を目的とした依頼も多く、表現活動や支援事業への社会的関心の高まりを感じる一年でした。



アトリエ見学の詳細はP31

【見学者感想】

- ・利用者一人ひとりが作品や仕事を誇らしげに話す表情に、毎日生き生きと過ごしている充実感を感じた
- ・個々の行動や特性を表現と捉え形にしていこうところにプロフェッショナルを感じた
- ・見学後、作ってもらうではなく、できることややりたいことをいかに作品として見せるかという視点に変わった

2023年度の事例

個人作家

作品を通してもっと活動を広げたい

織り&グッズ展での販売につなげ、完売!

障害者福祉施設

作品が売れた時の注意点を知りたい

事例と権利保護研修の情報を伝えた

中学美術教諭

作家の話を聞く鑑賞授業が好評だった。
今年は2校に増やして実施したい

昨年とは別の作家2名が
各中学校に出向き、
生徒に創作の想いを語った

大学生

卒業研究のため3日間、
現場実習をしたい

実習をしながら作家への
インタビューも行った

企業

創作現場を見学し、
作品とアパレル製品との
コラボがしたい

アトリエ見学を実施。
工房集の作家2名の作品を
デザインした製品が9点完成!



株式会社ビギ「工房集×FRAPBOIS」
作品:「相合傘」「チューリップ」阿部美幸

「みんなでつなぐアートのO!」



※2024年度報告書参照

※2024年度報告書参照

埼玉県立近代美術館
障害者アート企画展の会場
人も作品も
たくさんだね
翔平の作品は
どこですか?
タマップくん

Vol.1「ゴミを救ってアートが生まれた」は2021年度、
Vol.2「落書きからのコラボアートだ!」は2022年度の報告書に掲載されています。



埼玉県 障害者 芸術文化 情報

共に生きる社会を目指して
多彩な表現の魅力を広めています。

埼玉県では、障害のある人が創り出す作品の魅力を多くの方に知っていただきたく、美術展やダンス公演などを実施しています。文化や芸術は、新たな価値を社会に生み出すとともに、多様性を尊重し、人と人との相互理解を進める力があります。この文化・芸術の力により、多様であることを認め合う豊かな共生社会、心のバリアフリー、障害のある人の社会参加を推進します。

2009年から続く「埼玉県障害者アートフェスティバル」の実行委員会を中心に様々な参加イベントや普及事業を行っています。 ※玉線は「障害者芸術文化活動普及支援事業」に関連する取り組み

2023年度 主な事業 ◇埼玉県障害者アートフェスティバル実行委員会事業 ◆同会共催・協力 ○県補助事業

芸術性・創造性あふれる障害者アートの魅力発信

- 【美術】 ◆埼玉県障害者アート企画展 ◇埼玉県障害者アートオンライン美術館
◇障害者アート魅力発信事業(①障害者アートの常設展示 ②障害者アートの利活用推進)
- 【舞台芸術】 ◇近藤良平と障害者ダンスチーム「ハンドルズ」公演 ◇バリアフリーコンサート
- 【共通】 ◆各種イベントにて障害者アートを展示 ※実施記録は右頁に掲載

障害者の芸術文化活動の裾野拡大

- 【美術】 ◆障害者絵画展(希望者全員の作品を展示する公募展)
- 【芸術文化体験】 ワークショップ(◇打楽器 ◇スティールパン ◇ダンス)
- 【市町村事業の実施促進】 ◇市町村ワークショップの開催支援
- 【芸術文化活動普及支援事業など】 ○障害者芸術文化活動支援センター ◆表現活動状況調査

2023 topics

「VIVA LA ROCK 2023」で魅力発信!

コロナの影響で4年ぶりとなった屋外ブースの出展では、VIVA LA ROCKプロデューサーの鹿野淳さんがセレクトした絵画14点をキャプション付きで展示。また、大森郁夫さん、高谷こずえさん、真嶋翔生さんの絵画作品がフラッグのデザインとして利活用され、ガーデンエリアに飾られました。フラッグの前では多くの来場者が記念撮影するなど、イベントのシンボルとして大きく注目されていました。屋外ステージでは、いもの子作業所の仲間と職員によるロックバンド「いいもんず」とスティールパンバンド「Colors」が演奏。多くの観衆の前で発表する貴重な体験になりました。



「第71回埼玉県美術展覧会(県展)」と同時期・同会場で34作品を展示!


毎年、埼玉県立近代美術館で開催される県内最大の公募美術展、「県展」。障害者アートの展覧会としては史上初めて県展とコラボして、9名の作家の絵画34点を展示しました。5月31日から6月22日までの開催期間には、2,104名が来場。鑑賞者からは、「とても素晴らしい作品ばかりで見ええがあった」「県展で展示されている作品と遜色がなかった」といった感想が寄せられ、好評のうちに終了することができました。今後も多くの方に障害者アートの魅力を知っていただけるよう発信し続けていきます。



魅力満載

#SAITAMA #障害者アート


オンライン美術館



埼玉県マスコット
「コバトン」
「さいたまっち」

info

いつでも心に響くアートをお楽しみいただける「埼玉県障害者アートオンライン美術館」では、その魅力をさらにじっくりご堪能いただけるよう約80点の作品には学生が書いたレビューを添え、創作風景の動画や関係者の寄稿文も多数掲載。リアル展示のご案内や展覧会・イベント情報も随時、更新しています。



障害者アートの利活用事例 企業や団体に様々な場面で作品をご活用いただいています。

作品展示

オフィスへの絵画リース(半年ごとに展示替え)
企業: 真下建設株式会社
作品: 「みちを水族館」小幡海知生



企業での取り組みについて
オンライン美術館には
真下敬明社長からの寄稿文も!

作品・作家とのマッチング

「埼玉スタジアム2002」への展示作品提供
企業: 浦和レッドダイヤモンズ株式会社
作品: 「飛行機(浦和レッズ)」渡邊あや、「レディア」田中悠紀
浦和レッズをテーマに描いた絵画2点(購入)
他、11名の複製画(デザイン利用)




2023年度のイベント等での作品展示

5/3~5/7	「VIVA LA ROCK 2023」けやきひろば VIVA LA GARDEN
5/31~6/22	「第71回埼玉県美術展覧会(県展)」特別会場 埼玉県立近代美術館
6/7	「さいしんビジネスフェア」さいたまスーパーアリーナ
8/5~9/7	「メディアセブン障害者アート展」川口市立映像・情報メディアセンター メディアセブン
11/17~11/19	「はみ出す力 30展」川口総合文化センター リリア展示ホール

お問い合わせは、埼玉県福祉部 障害者福祉推進課 社会参加推進・芸術文化担当まで

電話: 048-830-3312

ファックス: 048-830-4789

埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±O

タマップだより

久しぶりに顔を合わせて活動できた今年度は、県内各地でも参加施設により多くの展示会やイベントが催され表現による交流が生まれていました。タマップでの経験も活かされ、丁寧な発信から障害のある人の表現の魅力がさらに広く深く地域社会へ浸透しています。

地域での展示の機会が作家の創作の励みになっています

北部
Northern

CILひこうせん

8/23-28 14th ampかわいいサミット

熊谷市の八木橋百貨店に30団体超が集う恒例イベント。商品販売や作品展示のほか、数年ぶりにステージパフォーマンスも復活!



CILひこうせん

ライフエール

本庄市のcafe NINOKURAで作品展示とグッズ販売を。また、上里町の無印良品ウニコス上里店で常設展示を実施。

西部
Western

ART(s)さいほく/昴

11/9-12 アートセッションズinさいほく2023

小川町立図書館で同エリアの作家たちの作品を紹介。また、東松山市のまちこうばGROOVIN'で障害の有無を問わず嵐山町の作家を紹介する「アートでつなぐ・つながる・見つかる 嵐山町のアート展」(6/9-17)、嵐山町ふれあい交流センターで町と「アート展☆嵐山」(12/15-18)を開催。その他、まちこうばGROOVIN'で新田新汰さんの個展「ぼくの現在地」(7/22-8/4)、滑川町の古民家ギャラリー かぐやで「森川里緒奈 作品展」(4/8-23)、東松山市のcomeya galleryで「カナザワカズマの世界 パペット人形とイラストレーション展」(4/9-5/28)を開催。



昴



皆成会

皆の郷 川越市立美術館市民ギャラリーで「十人十芋展2023」(5/31-6/4)を開催。

皆成会 所沢市役所の市民ギャラリーで「光の園作品展」(6/8-14)を開催。

嵐山郷 4年ぶりに立正大学熊谷キャンパスで7施設による「埼玉県社会福祉事業団 アート作品展」を開催。

info



各地の公募展情報も紹介!

アートセンター集の公式サイトやタマップのInstagramでは、参加施設のイベント情報に加え、全国から寄せられる公募展等の情報も発信しています。



tamap_saitama



啓和会

啓和会 久喜市の総合文化会館で第2回「けいわのさくひんでん~私が主役! For the future ~わたしたちの未来のために」(2/9-10)を開催。

たいむ共生会 久喜市コミュニティセンターで第4回「たいむ ぼくらのアート展」(6/25-7/1)を開催。

東部
Eastern

あげお 「埼玉県社会福祉事業団 アート作品展」(9/28-10/10)のほか、桶川市民ホールで「あげお 特別作品展」(8/2-6)、上尾市役所ギャラリーで「第5回あげお作品展~COCORON~」(9/14-15)、上尾市コミュニティセンターで「第1回あげお展示即売会~きて・みて・さわって~」(11/23)を開催。上尾市内の文化センターには作品を常設(四半期ごとに展示替え)。

みのり 上尾市の領家農村センターで領家グリーンゲイブルズ第2回演劇発表会「荒沢沼のかっぱ三四郎」(2/2)を開催。

南部
Southern

工房集 見沼区のCafe&Gallery温々で「工房集展」(8/4-13、1/17-2/11)、浦和区のマーブルテラスで「工房集 三人展」(1/17-2/11)、蓮田市の蓮田はすの実作業所で第11回作品展「からふる」を開催。見沼区のハレノテラスでは作品展とグッズ販売を開始(4/26-)。



工房集

さいたま市社会福祉事業団

さいたま市内のコミュニティセンターなど3会場を巡回し第9回「アート作品展 スマイル・プラス~ひとりひとりのその人らしさ~」(12/5-2/18)を開催。

織の音工房 浦和区のカフェマーブルテラスで「手織りの世界展」(5/10-6/11)を開催。



やどかりの里

やどかりの里 大宮区の施設内喫茶ルポーズで「やどかりの里作品展2024」(2/1-3/29)を開催。

ベルベッキオ さいたま市プラザノースのノースギャラリーで「お絵かっきオ展 まだまだ、楽しく」(1/13-25)を開催。

2023 topics

障害者芸術文化活動普及支援事業の連携事務局のサイトにインタビュー記事が掲載されました。

2017年度より全国各地で進められている本事業の中で、行政と多くの福祉施設が力を合わせ継続的に取り組んでいる地域はとて珍しいそうです。埼玉方式の要である私たちタマップの結束と活動にかける想いを、アートセンター集とART(s)さいほく、県の担当者の5人がそれぞれの視点から熱く語りました。

取組コラム

「基幹型」「特色型」2つの支援センターの役割とは一官民連携でネットワークを拡充する埼玉県「障害者の芸術文化活動に特化したネットワークが活動を豊かにする」



一般社団法人埼玉県セルフセンター協議会主催の「第24回彩の国セルフまつり」(6/3)が、4年ぶりに大宮区の鐘塚公園で開催。タマップで作品展示やグッズ販売を行いました。

「第46回きょうされん全国大会in埼玉」のオリジナル応援グッズに、皆の郷の小林大河さんのイラストが採用されました。



埼玉県造形教育連合、武蔵野線沿線美術教育実践学習会「び会」主催の「はみ出す力 30展~図工・美術の授業展~」(11/17-19@川口総合文化センター)で、県内の障害者アートの活動が紹介され、高谷こずえさんの複製画なども展示されました。



埼玉県障害者アートネットワーク

TAMAP±〇参加団体

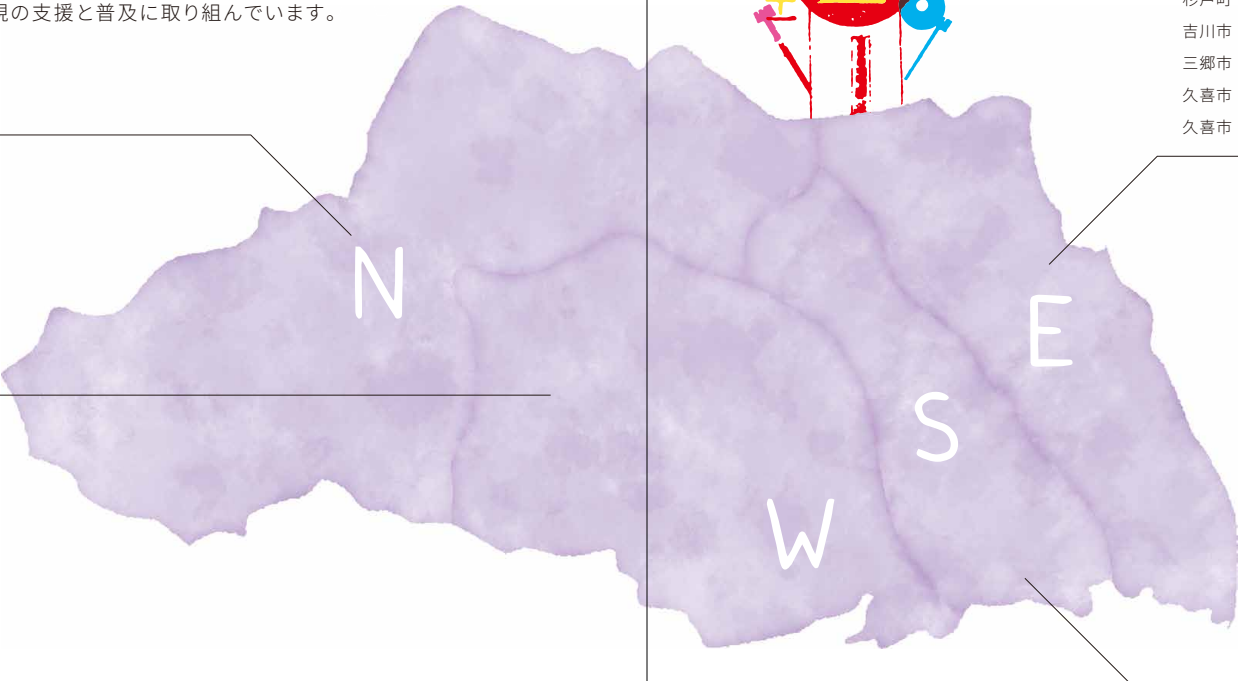
2016年に11団体から始まり2024年3月現在、34の団体が参加。
地域で展覧会やイベントを開催するなど、それぞれが表現の支援と普及に取り組んでいます。

北部

- 行田市 NPO法人 CILひこうせん
- 熊谷市 NPO法人 ゆりかご
- 熊谷市 NPO法人 ゆめたまご
- 秩父市 社会福祉法人 清心会
- 本庄市 ライフエール 株式会社

西部

- 東松山市 社会福祉法人 昴
- 川越市 社会福祉法人 皆の郷
- 新座市 社会福祉法人 新座市障害者を守る会
- 所沢市 社会福祉法人 皆成会
- 毛呂山町 社会福祉法人 埼玉医療福祉会 光の家療育センター
- 朝霞市 社会福祉法人 埼玉県社会福祉事業団 あさか向陽園
- 嵐山町 社会福祉法人 埼玉県社会福祉事業団 嵐山郷
- 吉見町 NPO法人 とりにてい



- 春日部市 医療法人社団 双里会 多機能型事業所わっくす
- 春日部市 社会福祉法人 ともに福祉会
- 杉戸町 社会福祉法人 杉風会 庄内
- 吉川市 社会福祉法人 彩凜会 ひだまり
- 三郷市 社会福祉法人 川の郷福祉会 おれんじ
- 久喜市 社会福祉法人 啓和会
- 久喜市 社会福祉法人 たいむ共生会

東部

- 上尾市 社会福祉法人 埼玉県社会福祉事業団 あげお
- 上尾市 NPO法人 みのり
- 川口市 社会福祉法人 みぬま福祉会 工房集
- 川口市 社会福祉法人 めだかすとりいむ
- 鴻巣市 NPO法人 ハーモニー
- さいたま市 社会福祉法人 さいたま市社会福祉事業団
- さいたま市 NPO法人 織の音アート・福祉協会 織の音工房
- さいたま市 社会福祉法人 ささの会 多機能型事業所ぼとふ館
- さいたま市 公益社団法人 やどかりの里
- さいたま市 社会福祉法人 久美愛園
- さいたま市 株式会社 生きいき
- さいたま市 社会福祉法人 邑元会
- さいたま市 医療法人 大社会
- 戸田市 社会福祉法人 戸田わかきさ会

南部

「想い」に寄り添う

工房集とアトリエ見学のご案内

その根底にあるのは、一人ひとりが主体的に生きていること。豊かに生きていること。
楽しく暮らしていること。人間らしく生き生きしていること。そのことを大切にしていること——

「集(しゅう)」という名前には、「新しい社会や歴史的価値観を創るためにいろんな人が集まっていこう」
「そんな外に開かれた場所にしていこう」という想いを込めています。

障害の重い人の表現の可能性を模索し続け、その作品を通じて
多くの人とつながり、関わり、新たな可能性が生まれています。

表現することは、人間が生きていることそのもの。

表現活動を通じて、障害の有無に関係なく、
人と人とを豊かにつないでいきます。

KOBO SYU



表現を仕事に

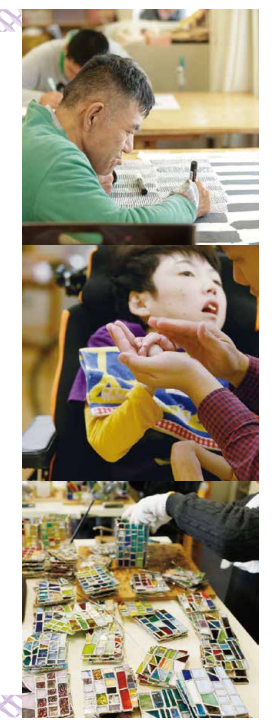
みぬま福祉会の表現活動は、「どんな障害がある人も受け入れる」理念のもと、1994年頃、
重い障害のある仲間*の仕事を模索する中から始まりました。当初は少人数での活動でしたが、
外からアートとして共感や評価を得たことで理解も広まり、2002年にアトリエ、ギャラリー、
カフェ、ショップからなる「工房集」を開設しました。現在では、11のアトリエを中心に約150人も
の仲間が、表現を仕事として取り組んでいます。「工房集」は、その表現活動の総称でもあります。
特別に才能がある人を集めたのではなく、地域に居場所を求めている仲間の人格を尊重し、
一人ひとりの想いと向き合う日々の支援の延長から、多彩な表現が生み出されています。

関わりを学ぶ

工房集では、「障害者芸術文化活動普及支援事業」の一環として、その表現活動の現場を巡る
「アトリエ見学」を行っています。絵画や織物の制作ができない仲間でも、「これしかできない」
ことから作品を生み出す、多彩な表現が共存する現場を見てもらい、表現活動には何が大切
か、ともに「支援のあり方」を考えていきます。担当スタッフは仲間の成長やスタッフの関わり
方、仲間同士の支え合いなどについて話し、仲間たちも自ら作品づくりへの想いを語って
います。また、表現を社会に発信する意義などを伝えています。

アトリエ見学 ※個別に対応しております。

工房集内のアートセンター集までお問い合わせください。電話：048-290-7355 (平日10:00-17:00)



*みぬま福祉会では施設利用者を「ともに働き・暮らし・地域をつくる仲間たち」との想いを込め「仲間」と呼んでいます

相談窓口

障害のある人やその家族、支援者に対しての
「創る」「深める」「広げる」「守る」をサポートします。

例えば、

- 自分の作品を見てほしい
 - 制作環境を見てみたい
 - アート活動をはじめたい
 - 支援の方法がわからない
 - 作品の著作権を守りたい など
- アート、福祉、教育、行政、司法など、様々な専門家や機関と連携して相談内容に応じたアドバイスをいたします。また、企業などからの表現の支援や普及に関するご相談にもお応えいたします。
- 障害のある人の表現に関することならどんなお悩みでもどうぞお気軽にご相談ください。

支援事業

障害のある人の芸術文化活動を支援する人たちとネットワークを育み
「みんなでつくる」をキーワードに展覧会や研修会を行っています。

- ・埼玉県障害者アートネットワークTAMAP土〇の運営
- ・埼玉県障害者アート企画展及び連動する研修等の企画・開催
- ・新たな“表現”の発掘と発表の機会創出 など

アートセンター集は、芸術文化活動を通して人と人がつながり
どんな障害のある人でも豊かな人生を過ごせる社会を目指しています。

TEL:048-290-7355 FAX:048-290-7356 受付:平日10:00-17:00
E-mail: artcenter@kobo-syu.com URL: https://artcenter-syu.com
〒333-0831埼玉県川口市木曾呂1445 (社会福祉法人みぬま福祉会 工房集内)
埼玉県「障害者芸術文化活動普及支援事業」の助成を受けて運営しています

「令和5年度埼玉県障害者芸術文化活動普及支援事業」報告書
art center syu 2023 report スタイル
みんなでつくる 埼玉方式

2024年3月28日発行
企画・発行: 社会福祉法人 みぬま福祉会
埼玉県障害者芸術文化活動支援センター アートセンター集
〒333-0831 埼玉県川口市木曾呂1445 (工房集内)
TEL 048-290-7355 FAX 048-290-7356

構成・編集: 武居智子、con*tio、工房集
制作協力: TAMAP土〇
アートディレクション: 藤沼重人 (Type-f design room)
企画展写真撮影: 鈴木広一郎
イラスト [p.6図版内]: 岸 潤一
グラフィックレコーディング [p.10-12]: 野際里枝
漫画制作 [p.26]: 関 翔平 (工房集)
デザイン [題字・ロゴ・タマップくん・企画展ロゴ]: 水川史生 (en design studio)
原画制作 [題字・タマップくん]: 尾崎翔悟 (工房集)

事業にご協力くださいましたみなさま、誠にありがとうございました。
© 社会福祉法人みぬま福祉会・埼玉県
※無断転載厳禁

これまでの活動報告やシンポジウムなどの記録、出展
作品や今後の展覧会・研修会などの情報は、随時ホーム
ページにアップしています。ぜひ、ご覧ください。

アートセンター集
Webサイト



みなさまのご参加を
お待ちしております!

困難や例外的な状況にある人を切り捨てない。

つないだ手を離さない姿勢は、

人間の「よりよく生きたい」という

当たり前の願いと共通して

個や集団を発達させる力になります。

他者の痛みに共感し、怒りや不安、

危機感を同じように感じる事が、できるかどうか。

仲間も家族も職員も一人ではありません。

多くの人と手をつなぎ、たくさんの力が合わさって、

きっと社会を変えていく力になるのです。

